



心學道話 八篇中 世三

9
3895
23



門 9
號 3895
卷 23

心 夢 道 の 注 八 篇 卷 之 中
新 小 出
同 じ の ち

拾でどんふ事人がおころやう初事ぬ
之寸の注で入尺のうごとは

養ひもする 養ひもする家
定家 御の名高い 秋よその名人素より

御公おさぬトやうら 平生お壽とあよとあ
さきるやまが 十二三あもあありたうと若殿

柳があておとさぬの注 例ふおあふうと

心 夢 道 注 八 篇 卷 之 中

早稲田 大學 図書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

障しやう子こが吹ふてあつて風かぜが吹ふく色いろの人ひとあつりが消き
 そあたるうらそれ着き殿との柳やなぎが難がた書しよとらんて
 風かぜが吹ふく煙けむり火ひが消きそうとやうと障しやう子こと
 たていと作あつて分わかつと。私わがども耳みみてい丈さかが
 うさそあふれれどやが室むろ家や々々それをおお使つか
 ちさ水みづと湯ゆどお機き嫌きらひとあく其その方かたの
 家いえお生う水みづと花はな柳やなぎの言ことばあまひいふあつて
 湯ゆど不ふ心こころ得えと中なりお急いそぎいれとたし
 なむやう中なとお叱しりあされとが由よし例れいの人ひとあ
 何なにおア、いふあやつと。ととが思おもうらと一ひと条じょう

命いのち息いきがけぬゆへ跡あとで年とし夜よ言ことばあつてへ氣き
 前まへを極きよくくお修あつてりまこと如何いかんの思おもひと
 里さともつとお尋たずね中なと。それおあれいふと
 うみうふならままい平へい生せいれ心こころがけが愛あいいお
 どもあせとせは言ことばあまひ一ひとつり
 うらま一ひとと三さんつりあつとゆへとがめこのとや
 障しやう子ことせうとりのみ中なりてうら風かぜが吹ふく煙けむり火ひ
 が消きくうらも入いれぬるうとやまを極きよくあつて
 老らういふはあやうでは名な壽じゆとよむうらむらじ
 いと作あつてらまこと中なりうらおあつりまま言ことばあまひ

見^と也^やと^らし^て泣^なれ^ばん^で居^ゐる^が。頼^たり^ます^のす^けと
 立^たて^て繫^け割^り口^を持^もつ^て佛^{ぶつ}檀^{だん}の^たら^しま^へに^も合^あは^せ
 と^もた^まふ^は子^こゆ^へ南^{なん}無^む之^しこ^りや^も自^じ害^{がい}で^もす
 る^うと^おり^ひ大^{たい}妻^{さい}の^せい^や。り^やそ^のあ^は
 ら^ば。と^めい^ふと^腕ま^さり^して^待て^居る^をや^まが
 主^{しゅ}張^{ちやう}と^もを^そと^へま^さり^して^結ん^で張^{ちやう}と^はり^して
 根^ねえ^と抱^かく^とと^もら^しま^すと^ふま^さり^して^そし^て
 玉^{たま}て^まい^うら^くし^い張^{ちやう}と^は惜^{せう}も^なく^根
 り^とか^らす^らり^と切^きる^其の^まに^櫃桶^{けい}へ^たが
 入^いん^とし^て何^{なに}の^あら^まい^夢で^りか^と身^みを^一箇^ごの^あ

長^{なが}う^きと^あり^し命^{いのち}い^らう^にく^て
 の^びて^冷あ^まき^張の^あが^らま^よ
 張^{ちやう}の^あい^かれ^く丈^{ぢやう}の^あ命^{いのち}の^いら^う
 と^欲と^も積^つど^奇と^水を^きく^と相^あい^く
 屋^やと^いひ^女と^あり^ひ。け^男も^あら^うし^と
 り^いひ^泣。こ^のあ^時に^また^とま^さあ^んど^の
 半^{はん}ふ^志と^あり^しま^す帰^{かへ}り^なが^らも
 都^{みやこ}も^いん^心と^あら^うへ^か人^{ひと}と^女房^{むすめ}
 心^{こころ}と^威心^{おそ}と^世と^思ひ^しく^こが^用へ
 這^は入^いると。コレ^かよ^今日^{こんにち}櫃^{けい}八^{はち}の^あら^まい^とも^あら^う

街^のく。わろく。トやイヤのよやさし女とよ
 と。かも^ん蔵心^んあふとありよと又^あ大^お格^り氣^き
 者^し中人^ん。あま人のまじりともく人の西北女^し座^ざ
 とむかり^あ禮^れを^ま軍^{ぐん}さくもあいかうしやんせ。大
 事^じの^ま多^たまが死^しん^んごもあうの^ま言^ごイヤ
 夫^まうら^ら樂^らと切^きく^く摺^ず入^いこ女^に房^ぶ夫^ふトやとと
 とふいでは。亭^{てい}そやしとアやさし^しの^のり^りの^のサ
 かろく^くの^の身^みと^とう^うん^んど女^に房^ぶ何^なト^とや^やと^とう^うの^の氣^き
 大^{だい}事^じる^る亭^{てい}まが死^しん^んどと^とり^りの^の歌^{うた}と^とり^りの^のわ
 うい^い亭^{てい}ま女^にト^とや^やと^とん^んの^の氣^きふ^ふと^と日^ひも^もあ^あら^らと^と

面^{めん}白^{はく}から^らふ^ふ亭^{てい}それ^れト^とや^やと^とマ^マア^アの^のつ^つの^のる^るふ
 心^{こころ}故^{こころ}と^とり^りの^のや^やら^ら新^{あらた}き^きん^ん事^じト^とや^やが^が奇^きと^とう^うむ
 と^とり^りの^の蔵^{くら}心^んあ^あ事^じ女^に何^なと^とさ^さし^し志^しや^や建^たよ
 女^にの^のま^ま言^ごと^とか^かし^し我^{われ}が^がう^うま^まれる^るの^のの^の女^に
 イヤ^いらん^んで^でん^んあ^あま^ま亭^{てい}そ^そん^んた^たう^うら^ら今^{いま}亭^{てい}を^を續^つ
 ぶ^ぶん^んの^の女^にう^うま^まい^いでは^はそ^そん^んあ^あら^らマ^マア^アの^の死^しん^んで
 死^しん^んと^とり^りの^の亭^{てい}あ^あら^らふ^ふ人^{ひと}死^しな^な終^{はつ}む^むよ^よ由^{よし}ぬ^ぬと^とり^りの^の
 よ^よある^る款^かふ^ふみ^みが^があ^あま^まの^のら^らど^どか^かし^しと^とく
 我^{われ}が^がお^おの^の齒^はま^まま^まの^のの^の女^に何^なと^との^の後^{あと}の^の
 い^いた^たい^いて^ての^の亭^{てい}そ^そん^んた^たう^うら^らり^りの^の女^に何^なと^との^の後^{あと}の^の

下はとさういふ二年小回小。復の秋あはれはッの
 鐘女房ハ頼みくらして腰さうしだき小森
 床をぬふ森無咄の妙——纏ういふさういふ
 あそびの多い男で。足が長いからツツも
 あ——が餘て異色の外へあるとあひい出し
 てコレおき人とよんごあがあはれと亭そんなら
 なんとよんご女より巧くは
 長うきとありふ森無咄の纏うくと
 つゆぬ亭主此あ——のあがさよ
 とゆ——ことりあもうあはれりも4うがけ女よハ

かさねぬ。遊が森等もさういふ社をさういふ
 がる女房がさういふ。さあも遊があざりませ
 親又の足と切たがはがいくらもあコレ松
 見世の兼用——して仕兼さうハ——とゆあそ
 みきどあんのいふぬあはれさういふ知をがあ
 りのう人。ひらこんだ。佛あうり——と居るが年
 考のあうりせんと。扱も親又のあ——の長さよ
 と切たがる森主人ハ旦那の足とさういふこ
 がる嫁ハ響のあ——と切たがる。とれも結送
 互——して居るのいふあはれが災の根とゆあ

三國とも貫つて大なるものを支と一ら
その為のそへ南を阿彌陀佛との持
あはれ南無妙法蓮華經とのあひもあり
指のむきやうぶちがふとさす交もあがふとあ
が指うの用がたうの目さすあひ人の后とあひ
せふのしり。ゆびのどふでもよめけ解のちるふ
目がつけむふのゆびをうりてふべとてうらけん
くしが出来る。あちのゆびの念仏衆生捨取不
捨のけともあひあがふ捨とりを向よりと
念仏無間禪 天魔具言七國律國滅地

宗無得法華一人の成佛と持と
出くくぶるとイヤ 天竺たどの活のい
教。もい後へ清めあへあらんらくとりあ
持もあともふゆびのくくべ合。大なる門千景
有る。ぶらうらんあもあひありて。小道の千景
あ別ふあれらるも。約るあひ此廟の大道を
知らせるとり。イヤあま此方の法華の諸經
念の一の此上もたうの念の念旨イヤ我が
乃念佛の一念彌陀佛所成を量罪との
佛さぬの法誓言不違ひたうと人を達

つせ地獄へ落してとらへしませる教もある。何の
 為ふとへといふものあるをといふ。どあそ人の
 悔ふいさをあてやりとぬれり。行もあつし
 めおたなる人といひて生ぬるめれを知り
 かり。いろはのいれ子あふいでも出まふす
 別ふ愛明であらぬがゆふぬといふでもあ
 只我れをすく親父の身、小成が者。至人乃
 身ふなるが慈といふ。女ハ政の上り、是れ
 先走夫のまふあが貞とやをむり外ふ
 何も初りゆいゆぬ。お直所ふむり
 一車カの

禮ハといふものぞあたりまゝさ。勿論あて
 働とすものゆへ。別ふといふ樂をら
 なく女房と持て初めは難敷きと
 一とが。人といふものいふて大率あとの。さ
 来植ふがー是れ漏りやうふあるといひ
 ぬる。又夫婦の中も年とわさるる
 妾とてが色をかり初めの志の志ま
 ぐーすもやうふ敷が世るはめり
 癖でいなりまふやうふ敷が世るは
 そふであいあき正直で系和のう

有とて堪忍強い女権八のそとくどう
 らくととて先情棄をおて我儘をたき内
 ふ外は女ふたりどが出来る内は女房の
 嫌みたり外の女は言へおもきも通ら
 かういづれとてい女の房を出しとそは女を
 内へ入るといふ事いげおれも内はとて
 ぬけの女房で何も替もまい申さんぞと
 行ともいふ事いづれとておたいとあり
 心うふんふんうらも。おんがなる程嫌ふ
 今どの内ふたりも落つて居るがやふ

あるお外子家として只おらりくこのつと
 減たふ内へうらつぬが。妻の事を権
 生ぬきい権八がたかへ。啼きと
 ずいといを機嫌ととほ。きんをと
 とぬきいどのやふおとどおらり
 とぬ。とぬのあを物と果えい。約束の
 女を内へいさやうと思ふうと女房は
 たりぬまのりおらりいおらりいおらり
 な事おらりいおらりいおらりいおらり
 ともおらりいおらりいおらりいおらり

何ぞこころいのご 我も悪の事ハ一ツもたふん人と
 ちいさくもやうも事ハ一ツと。さう福ぢふ福ぢつ分
 てもとらふもどつもお悪しーたき水とりの事り
 ぢーもたふたふぬ推ハりてあましー
 ちつとーして 庚辰が 悪ハ 柳ハ 南
 で福りあつて 辰もおまが 柳ぢやうも 仕方ぢたふ
 親くせを 幸ふくーた免 替たさく
 うふ 悪まぬく 何ふかをせん
 何の福の神のあこめくとりかえあはれ神の
 鈿女命とりのく 悪魔とらふふとりの伝へ

けしと鼻ハあつりをふで 親や 類を
 ちく 醜い類
 あ方の山さくーと 若ハ 死
 うさふあぢーのきづるいりあ
 けうとが 赤鹿りすんが あは 荒爾とーと
 親ハ 誰が 見ても ぢーも 悪むと 其ハ あいそ 其
 荒ルが 悪魔とらひ 史ト やうら 天照 白王
 太神が 安間ハ 若戸 不水 漲きなる 水と 特 鈿
 女命と 連きそいそ 神樂と 奏と せたぬが
 天照皇 太神 様が 麻と 十とーあけて 水 禊ぎ

ちきよととやります。第ふとふの福ありとそれ
 中人福は神とりよと我くふりは面と極ふ
 かけと並けりドや何ふもあらぬ。どぞどのの
 通りふ莞爾くとして誓せむ丈夫とふ福
 然神。あままが嘆ふのりめとアリく飯け
 アリくとあまらくと誓うたのその。所が嘆く
 りめとエ、何ドやいのと懐貪の接極のそはあふ
 貧乏神作扱もやいとわり。何のひんがう神の
 と御後あまきまところ。庵がふと深図廟といて
 形りの若我らと信心の者どもおまが通りあまら

くとばは持く形のうちをとも奉ふせい家田
 五ふ深の教で長者と志ぶいう知で志まを深く
 アしくエ、めんどうあとりよとふひふ志ぶくたう家
 とんうくとくととと酒とふ終森せむ
 刊らむととも神やまのうん
 若貧乏のめくばあぐす家より。志ぶく
 志はと因福が破きくのうと志とともびんぼふ
 す家事一類ひあし。そしげ貧乏させ
 ずむ正覺のしとと。貧乏神は法死宣
 檀八の女房の志量のころが世莞爾くしと

たういマアこふーや

脚きのりひのやうなと顔がくまらりて
鼻のひーやげて尻のぢりこり

かうんどよふと 危てつと ありあさ せまが やりわり
ありそりと 驚ふ 顔と 赤くーと お恥う ちうたご
ままやうと うらむのき 居るむうりて 獲ととてぬ
とあぞーとと ありあうらコレかよふ 赤とう白せく
ねもぐうーいしや 海ぬ。何でも 返すーら。返款
をせぬと たきさ 物だぞ。女房をいせも 私いうこと
りふも けふんごうりの 赤なりすせんーとあぞおぢり

ーりわれまうせと 涙を流して 徳とすきごも
髪とと ありのき 髪をまうまはぬか ちり。居り交
むサア 返すーらと 今すぶおふめサアーらゆん
サア 返すーらと 責らきても 女房の 話のぞ
うことりふも けふのどんちのけふ 知らぬ申へ。こまのり
とらうと 涙が 出らむらり 一言も おやせぬ 只をと
つらき。どふも 考とやら 物も 背きまうまうい 危
れりりいどふと ああ。ーりわれと 遠慮で あり
りふも せまき 髪ぬ申人どふも 危難が たらひ 驚く
待く 下さき。そふ 伴らうと 事なら 今昔一と

捨すておうほすふやふふ一しすすが人の人今今日日の
 心こころ掛かのの大たい切きのの交まじりり。そそはは為なるる小こ漢かんのの眼まなこ烈れつはは若わかく
 後のち嗣ついで一ひと回かへりをを以もつて惡わる小こ為なるる勿なほ以もつて善よ小こ不な為なるる
 つつののりり大たい事じ々々のの教しよとと矢しりりぬぬややうう中ちゆうとと。おお路ろ
 名なへへののあありりががここのの中ちゆう選せん言げんをを以もつて成なすすなり

一すす

心學乃の語八篇卷之中一終

